

出題の意図

【問 1】

本文章において、筆者は、第 1 段落「ササラ型とタコツボ型」、第 2 段落「近代日本の学問の受け入れ方」を経て、第 3 段落において、「共通の基盤がない論争」の小見出しの下で、タコツボ型文化において共通の基盤に欠けることについて、具体例を挙げつつ論旨を展開しているが、通常読解力があれば、かかる論旨は容易に読み取れるものと思われる。そして、下線部①の直前に、新聞匿名欄が攻撃するインテリと石川氏が攻撃するインテリが同じものではなく、攻撃の論拠が正反対であること（天下国家の問題から逃避すると叱られ、他方では何でも天下国家に関連させると攻撃されること）についても指摘されている。

本問では、これらの前提事情と基に、それがいかに筆者の「当惑」に結びついているかを推理して論理的に述べることを期待されているのであり、誰でも容易に読み取れる前記前提事情につき、いかに的確かつ簡略に論述することができるか、さらにその前提事情から筆者の当惑の原因を推理することができるかが試されており、受験生の理解力、文章作成能力、推理力を推し量るものである。

【問 2】

本文章が執筆された時期から比べると、はるかに情報化が進み、個別化された科学や業界間においても共通基盤としての情報が共有化されつつあるように思われるが、他方で、タコツボ化の認識及びそこから脱却策として位置付けているかどうかは不明であるものの、司法界における革新的な司法改革が推し進められるなど、実質的に見れば、孤立化したタコツボ化からの脱却策が講じられつつあるように思われる。

しかしながら、複雑化した社会において、専門化、専門化は進む一方であり、それが時代の要請でもあることからすると、組織の細分化、専門化は現代社会において避けられない宿命であると思われ、ともすれば各組織がタコツボ化しやすい傾向にあることはまた避けられない事態であることから、これに対応する策を検討することは組織体のリーダーとしても重要なことであると思われる。

組織体の思考方法が固定し沈殿化することについての指摘がなされている（第 5 段落）ことを踏まえると、リーダーとしては、これまでと異なった思考法が必要とされるのではないかと思われ、組織化の方法についても、これまでと同様の階級的な同一性に立った組織化と、それとは違った次元に立つ様々な組織化の方法を組み合わせることを考える必要があるし、組織に対する様々なイメージを合成しつつ、流通度の高い言葉を見出し、組織内での言葉の沈殿化を打破するために、自主的なコミュニケーションの幅を広げるなど

の方策等が考えられるであろう。

いずれにしても、受験生においては、前記前提事情を踏まえて、さらに第4段落及び第5段落で展開されているタコツボ化した組織体の問題点を踏まえて、自らの想像力と直感力をも駆使して、それに対する的確な対応策を論述することが期待されているのであり、受験生の読解力、論理的推理力、想像力、文章作成能力を試すものである。